

中学校における武道必修化（剣道）に関する研究

— 指導内容と剣道技の観点から —

A Study of Traditional martial arts (Kendo) as a compulsory event
in P.E. at junior high schools

— from the viewpoint of teaching contents and kendo-waza —

小田佳子¹ 恵土孝吉²

Yoshiko ODA¹ Kokichi EDO²

¹東海学園大学 人間健康学部 人間健康学科 ²金沢星稜大学 人間科学部

¹Dept. of Human Wellness, Tokai Gakuen Univ.,

²Fac. of Human Sciences, Kanazawa Seiryu Univ.

キーワード：剣道、武道必修化、有効打突、技、初心者指導法

Key words : Traditional martial arts as compulsory event in P.E.,

Yuko-datotsu : A valid point, *Waza* : techniques,

Teaching method for beginners

要約

中学校の保健体育では平成24年度から武道必修化が実施される。しかしながら、剣道の実施については、施設、用具、指導者、指導内容など多くの面に関して問題点や課題が挙げられている。学習指導要領には「剣道は、竹刀を使って、基本となる技や得意技を用いて相手と攻防を展開しながら、互いに“有効打突”を目指して勝敗を競い合う運動である」と示されている。そこで本研究では、試合における有効打突の観点から、中学生の大会レベル別に有効打突となった技の種類を調査分析し、初心者指導における指導内容について、剣道技（技術学習項目）の観点から、技の選択やその順序性に関する基礎的資料を得ることを目的とした。

調査結果として、初級レベル大会（161試合、有効打突211本）では、しかけ技が有効打突全体の94.6%を占め、応じ技はわずか8.8%であった($p < 0.001$)。中級レベル大会（112試合、有効打突127本）では、しかけ技が有効打突全体の90.6%を占め、応じ技は10.2%であった($p < 0.001$)。上級レベル大会（314試合、有効打突370本）では、しかけ技が有効打突全体の88.4%を占め、応じ技は11.6%であった($p < 0.001$)。以上の結果から、中学校における剣道の指導計画の中で指導されるべき剣道技を精選し、学年ごとに示した。

Abstract

The purpose of this study is to investigate *yuko-datotsu* from 3 kinds of different level tournaments for junior high school students. Further, from the results, we would like to consider *Kendo waza*, from the viewpoint of the teaching methods for beginners.

The results are the following. At the Beginner Level Tournament (211 *yuko-datotsu* / 161 *shiai*), *Shikake-waza*, spontaneous techniques, was 94.6% of all *yuko-datotsu*, but *Ouji-waza*, responded techniques, was only 8.8%. ($p < 0.001$) At the Intermediate Level Tournament (127 *yuko-datotsu* / 112 *shiai*), *Shikake-waza* was 90.6% of all *yuko-datotsu*, but *Ouji-waza* was 10.2%. ($p < 0.001$) At the Advanced Level Tournament (370 *yuko-datotsu* / 314 *shiai*), *Shikake-waza* was 88.4% of all *yuko-datotsu*, but *Ouji-waza* was 11.6%. ($p < 0.001$) Based on the results of the survey, *Kendo-waza* were selected for the Teaching Unit Plan in P.E. at junior high schools.

1. 緒言

平成18年12月に教育基本法が60年ぶりに改訂され「これからの日本人の育成」を踏まえ、近年の社会の道徳規範が顕著に低下し、また日本の伝統文化が喪失していく状況を憂慮して、新たに「公共の精神の尊重」「我が国の伝統と文化の継承」が盛り込まれた。教育目標の第5項に挙げられている「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という項目が、平成24年度から実施される中学校保健体育科における武道必修化の源であると考えられる。(巽, 2009)

しかし一方で、学校現場での武道(剣道)実施には、1)指導者の問題(体育教師の剣道未経験)、2)指導法(学習指導案)の工夫・開発、3)環境整備(防具、道場を含む)などの様々な課題が残されている。現実的に中学校現場では1種目につき各学年で10~13時間程度の授業時間を確保することが限界であり、その限られた時数の中で体育教師が剣道未経験者であってもその指導ができるような指導法(学習指導案)の工夫・開発は、喫緊の課題であると考えられる。この手始めとして(財)全日本剣道連盟は、剣道の手引き書として昭和53年発行した「幼少年剣道指導要領」を改定し、平成20年に「剣道指導要領」を、平成21年に「剣道授業の展開」を発行した。体育授業においては、これらの指導法を参考にしながらさらに実践を通し、その指導内容の検討と、指導法の工夫・開発が必要とされる。中学校・学習指導要領解説によれば、「剣道は、竹刀を使って、基本となる技や得意技を用いて相手と攻防を展開しながら、互いに“有効打突”を目指して相手の構えを崩して打ったり、受けたりして勝敗を競い合う運動である」と示されている。つまり、武道の特色が対人的競技である以上、授業では基本動作に終始することなく、簡易な試合を展開し、有効打突を競うことの喜びを味わわせることが中核となってくる。そして、

「有効打突とは何か」を、体育という実技の中で体得することが重要なことであり、武道としての剣道を理解することにつながると考える。

そこで本研究では、学習指導要領にある「竹刀を使って、基本となる技や得意技を用いて相手と攻防を展開しながら、互いに“有効打突”を目指して勝敗を競い合う」という目標達成の方法を有効打突となった剣道技の内容調査から探りたい。これまで、全日本選手権など一流選手を対象とした試合分析に関する先行研究(三橋ら, 1972; 巽ら, 1997; 恵土ら, 1983, 1999; 中村ら, 1999; 巽ら, 2001)は多くなされてきたが、初心者や未経験者を対象としたもの(三橋ら, 1972; 恵土ら, 1970, 1984)は希少である。そこで、中学校で初めて竹刀を握った未経験者、および2・3年たった初心者が多い中学生公式大会をレベル別に調査し、実際にどのような技が試合で使われ、有効打突となっているのかを調査分析し、剣道技(学習内容)の指導の順序性や技の選択について検討した上で、剣道初心者指導法の基礎的資料を得ることを目的とした。

2. 研究方法

2-1. 調査対象試合と有効打突

K市中学校新人剣道大会(初級レベル大会)の161試合、I県中学校剣道大会(中級レベル大会)の112試合、全国中学校剣道大会(上級レベル大会)の314試合の合計587試合を調査対象とした。

2-2. 基礎資料の収集

技術レベルの異なる3種類の公式大会(市新人大会、県大会、全国大会)について、剣道熟練者(段位:4~5段)が、対象試合を観察し、有効打突となった技の種類と本数を試合会場において記録した。さらに、検者がVTR法で有効打突を確認し、技の分類を行った。

対象試合の記録にはSONY Video Recorder Digital Handycam DCR-TRV10 3台、再生機にSONY Video Cassette Recorder WV-VS1NTSC 1台を使用した。

2-3. 技の分類と名称

技の分類と名称は、文部省「学校体育実技指導資料 第1集 剣道指導の手引(1993)」に準拠し、この中に示されていない技については、全日本剣道連盟「幼少年剣道指導要領(1993)」及び全日本剣道連盟「剣道指導要領(2008)」の対人的技能の内容に従い以下のように分類した。

しかけ技:基本の技(メン・コテ・ドウ)

出ばな技(出ばなメン・出ばなコテ)

二段の技(コテメン)

払い技(払いメン・払いコテ)

引き技(引きメン・引きコテ・引きドウ)

応じ技：抜き技（小手抜きメン・面抜きドウ）

すり上げ技（小手すり上げメン・面すり上げメン）

打ち落とし技（小手打ち落としメン）

返し技（面返しド・面返しメン・小手返しメン）

その他：反則、かつぎ技、など

なお、面、小手、胴の一本打ちの技については、“基本の技”とした。相手の左胴を打つ逆胴は、胴として“基本の技”に含めた。また、“相面”により有効打突と判定された面は、“出ばな面”とした。さらに、相手の反則により一本となった場合と、かつぎ技は“その他”とした。

2-4. 統計処理

有効打突の種類の内訳の分布と技術レベルの偏りは χ^2 検定によって検討した。これらが有意であった場合には、しかけ技と応じ技の比較にポアソン分布(Poisson distribution)による比率の検定を行った。検定の繰り返しによって生じる危険率の調節には Bonferroni 法を用いた。有意水準は $p < 0.05$ とした。

3. 結果

3-1. 試合種別有効打突数

有効打突の本数は、初級レベル大会で 161 試合中 211 本、中級レベル大会で 112 試合中 127 本、上級レベル大会で 314 試合中の 370 本の合計 708 本であった。

3-2. 有効打突の技の分類

有効打突の技の分類結果を、Fig.1 に示した。

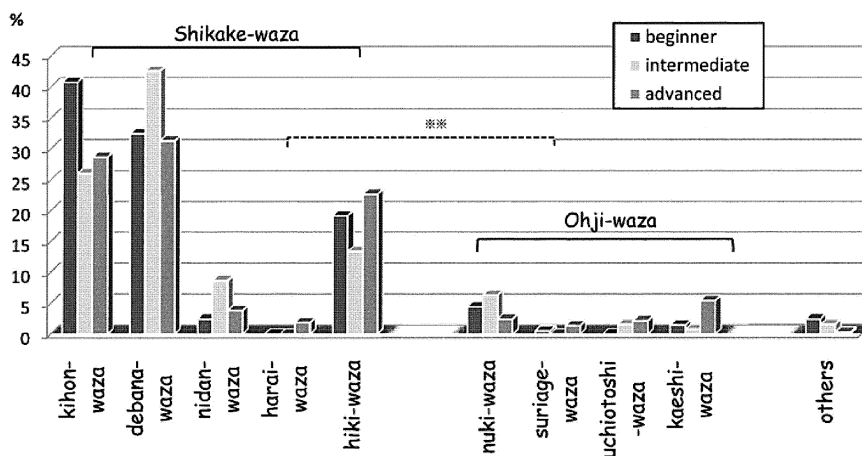


Fig.1: 有効打突の技の分類

***p < 0.01

全有効打突の中で、しかけ技の占める割合は応じ技と比較して有意に大きかった($p<0.001$)。この傾向は、全ての技術レベルにおいて同様であった(初級 : $p<0.001$, 中級 : $p<0.001$, 上級 : $p<0.001$)。つまり、技術レベルの差に関わらず、中学生の剣道の試合では、しかけ技が応じ技に比べて有意に多くなる結果が得られた。具体的には、しかけ技は、初級レベルで94.6%、中級レベルで90.6%、上級レベルで88.4%であったのに対して、応じ技は、初級レベルで8.8%、中級レベルで10.2%、上級レベルで11.6%であった。初級から上級へと技術レベルが上がるごとに、応じ技の僅かな割合の増加は認められるものの、総じて有効打突の10本中9本がしかけ技で決まる結果が得られたことになる。

しかけ技の中でも、面、小手、胴といった基本の技が、初級レベルで40.7%、中級レベルで26.0%、上級レベルで28.6%であった。出ばな技は初級レベルで32.3%、中級レベルで42.5%、上級レベルで31.3%であった。引き技は、初級レベルで19.1%、中級レベルで13.4%、上級レベルで22.6%であった。ここでは、初級レベルで基本の技の割合が大きく、中級レベルでは出ばな技の割合が大きくなる結果が得られた。

3-3. 有効打突の技の種類

有効打突の技の種類の結果は、Fig.2 に示した。

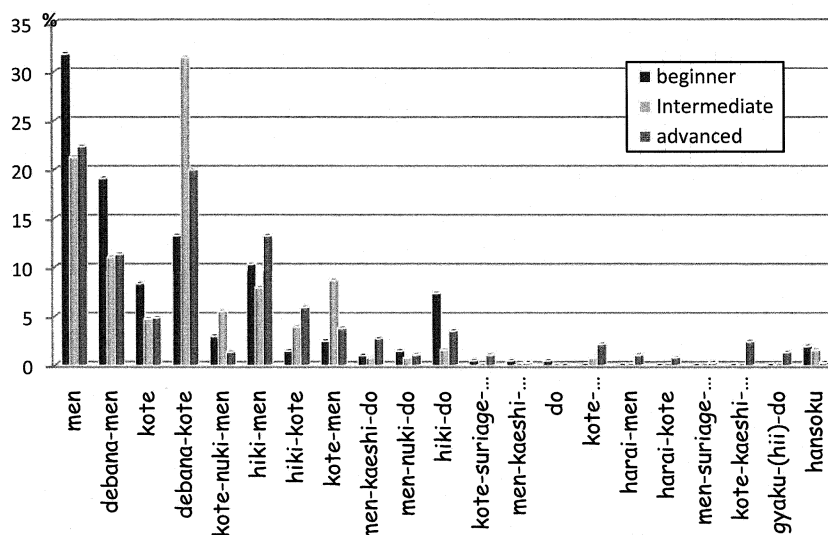


Fig.2 : 有効打突の技の種類

メンが全有効打突の中で占める割合は初級レベルで31.9%と最も多く、中級レベルで21.3%、上級レベルで22.4%であった。次いで、出ばなメンが、初級レベルで19.1%と最も多く、中級レベルで11.0%、上級レベルで11.3%であった。しかし、初級レベルでのメンと出ばなメンの間には有意差($p<0.05$)が認められたが、出ばなメンと出ばなコテの間には有意差は認められず、出ば

なメンと引きメンの間には有意差($p<0.01$)が認められた。

また、出ばなコテが占める割合は、中級レベルで31.5%と最も高い有効性を示した。中級レベルでの出ばなコテと出ばなメンの間には有意差($p<0.01$)が認められ、メンと出ばなメンの間にも有意差($p<0.05$)が認められた。

上級レベルでは、メンが22.4%と最も多かったが、次の出コテ19.4%との間には有意差が認められなかった。しかし、メンと引きメン、出コテと引きメンの間には有意差($p<0.01$)が認められた。つまり、初級ではメンが、中級では出ばなコテの有効性が顕著であるという結果が得られた。

4. 考察

4-1. しかけ技の重要性

第45回全日本剣道選手権大会、全63試合を分析対象とした中村ら(1999)によると、有効施技および全施技ともに仕掛け施技の出現割合が非常に高かったものの、応じ施技の出現割合が全施技内では14.3%、有効施技内では25.6%を示し、全施技と有効施技間における出現内容に有意な差($p<0.01$)がみられ、打突部位内容については、全施技および有効施技ともに面、小手、胴、突きの順で多くの出現がみられたとし、また、応じ技では、特に面返し胴の有効性を報告している。つまり、一流選手が出場する全日本選手権大会においてもしかけ技の出現割合が非常に高かったという本研究と同様の結果が示唆された。その一方で、本研究では初心者・未経験者の中学生を対象に有効打突に焦点を絞って技を抽出しているのに対し、ここでは全施技と有効施技間における出現内容を検討しており、相違点として、一流選手では、応じ技の有効性の割合が高かったことを示している。また、恵土ら(1983)は、昭和53~55年の全日本剣道選手権大会の内NHKで放送された準々決勝以上の上位試合を対象として、その有効打突について、しかけ技が35本(74.5%)、応じ技が12本(25.5%)であったことを報告している。これらを本研究結果と比較すると、一流選手と中学生のいずれにしても、剣道の試合においては、技の分類ではしかけ技が有意に高い結果であることに変わりはないことが示唆される。しかし、応じ技に関しては、中学生では大会レベルの上昇に伴って僅かにその割合が上昇するものの、上級レベルでもその有効率が11.6%にとどまっていることから、その難易度が高いことが推察される。また、中学生・高校生を対象として試合分析をした恵土ら(1984)の報告では、中学生の全有効打突に占めるしかけ技の割合は84.4%、その内、飛び込みメンが35.0%とし、高校生では89.5%、飛び込みメンが35.1%であったとしている。先行研究で対象となった中学生の大会は市新人剣道大会であったことから、本研究の初級レベルと同様と考えられる。従って、初級レベルで有効打突となったしかけ技の割合は94.6%と今回の結果の方がその有効性は多少高く、メン技については31.9%とほぼ同様の値を示した。さらに、小・中・高・一流選手を対象とした三橋ら(1972)の報告では、試合時の発現打突におけるしかけ技の割合は、小学生が91.9%、中学生が87.4%、高校生が78.8%、一流選手

で84.6%であったと報告している。本研究では、発現打突ではなく有効打突を対象に調査分析を行ったが、中学生の全レベルの結果を合計すると、しかけ技は88.4%となり、年齢とともに技術レベルが上がるに従ってしかけ技の割合が僅かに低くなるものの、その有効性の高さとの割合の高さは、先行研究と同様の結果を示していた。

その一方で、本研究では、中級レベルにおいて出ばな技、特に出コテの有効性が明らかとなった。これは、初心者で滅多やたらにメンに飛び込んでくる相手に対する出ばな技の有効性を示すものであり、メンに次いでコテという技を習得した結果と推察される。

剣聖といわれる高野佐三郎範士(1915)は、「剣道は攻むるありて受くるも防ぐもなきものなり」と練習の心得を説いた。笹森(1969)は「攻撃は最大の防御である」「試合においては、この先をかけて勝ち取るように励まさなければならない。これは試合にあたって一番大事な心得である」と説いていることから、時代に関係なく攻撃技が優位とされる教えは、剣道指導の中で厳守されているようである。また、小田(2001)は中学生、高校生、大学生、外国人を対象として剣道技の難易度を報告している。難易度(Median)を標準得点でみると、易しい技の順で、面 70.5、小手 65.5、胴 60.8、小手一面 60.8 であり、しかけ技が容易で応じ技が難しいという日本人と外国人からほぼ同様の結果が得られたとしている。従って、限られた時間の中で、学習指導要領に示された試合を楽しむ能力を生徒に習得させるためには、しかけ技、特にメンの習得を第一とすべきであると考えられる。さらに出ばな技についても、しかけ技の中に含まれることから、基本の技や二段の技、引き技の修得の後に、応じ技とともに取り組ませたい。

4.2. 気剣体の一致と残心

上述のように飛び込んで面を打つ技術が剣道技術の中核であるが、この打突は、単に竹刀で相手の面(打突部位)を打てば一本(得点)になるのではない。気剣体の一致した動作で打突する必要がある。充実した氣勢(気)で、適正な姿勢(体)をもって、竹刀の打突部である物打(剣)で、刃筋正しく打突し、しかも残心あるものが有効打突となる。残心とは、打突後に相手に対して身構えや気構えをすることである。すなわち、打突の姿勢が有効打突判定の要になると言える。

この点が、サッカーや野球のようなゲーム・スポーツとは異なるところである。サッカーでは、どんな方法でもゴールにボールが入れば、敵・見方チームに関係なく入れられた方の失点となる(own-goal)。また、野球では、除けたバットに当たった打球でも野手が捕れないところにボールが飛べば安打になる。しかしながら、剣道の有効打突は、スポーツのルールを支配する精神とは異なるところであり、武道としての日本文化的特徴でもある。このことを学習指導の中で十分に生かす必要がある。従って、素振りや足さばき等の基本動作の習得に終始する指導は、武道としての剣道を学習したことにはならないと考える。

4-3. 剣道技（学習内容）の指導の順序性と技の選択

上記の考察を基礎として、中学校3学年各13時間の指導すべき技項目（表1）を作成した。

基本動作	姿勢（自然体）、礼法 構えと目付、構え方納め方 足さばき・体さばき・素振り 掛け声（発声）・間合 基本打突（面・小手・胴）の打ち方と受け方 防御の仕方 有効打突の判断・残心 剣道具の着装・後片付け			
		第1学年 （10～13時間）	第2学年 （10～13時間）	第3学年 （10～13時間）
基本となる技	し かけ 技	<一本打ちの技> 面、胴、小手 <連続技（二・三段技）> 小手一面 <引き技> 引き面	→面－胴 →引き胴	<出ばな技> 出ばな小手 →出ばな面
	応じ 技		<返し技> 面返し胴 <抜き技> 小手抜き面	→面抜き胴
得意技	自己の技能・体力の程度に応じて最も打突しやすく、相手から効率的に有効打突を取ることができる技（得意技）を練習する。			
試合	<ul style="list-style-type: none"> ・打ち込み練習、自由練習や試合を積極的に授業の中に取り入れる。 ・「気剣体の一致＋残心」を目指し、有効打突の判断を身に付けさせ、互いに試合（審判）ができるようにする。 			

表1 指導すべき剣道技（学習内容）と順序性

この指導計画で骨子とした剣道技術は、しかけ技であり、特に飛び込みメンとし、同時に防御の練習を加え、有効打突の判定能力の習得を中心に展開した。第1学年では一本打ちの技を中心に、有効打突を習得する。第2学年では相手との攻防を中心に、生徒が互いに審判をし、試合を楽しむことが可能となる展開を試みた。さらに、選択制で可能となれば第3学年では出ばな技の習得を目指した。指導の際に、ただ多くの技を提示するのではなく、限られた技の中から攻防を展開し、自由練習や簡易な試合から有効打突の習得を目指す学習時間配分を考慮することが重要である。有効打突として、気剣体の一致が見られ、尚かつ残心ある技（二段技を含む）の定着と、その防御の仕方を確認し、攻防を楽しませることが先決である。その際、ただ我武者羅に技を出すのではなく、相手の攻撃に対し、互いに安全で的確に防御する避け方の指導も第1・2学年を通して必要となる。

基本動作については、毎時間繰り返し指導し身に付けさせるものとして、一度に全てができる

ようには考えない。毎時間繰り返し練習することで自然に身につくものとする。しかしながら、それらの習得に時間を要することも事実である。そこで、基本動作を身につける際に、剣道具の脱着や後片付けなど2人1組やグループで競わせ、互いに協力しながら習得できるように工夫する必要がある。剣道は、常に対人的技能であり、あらゆる場面を通してコミュニケーション能力を育成することが不可欠となる。以下に各学年での試合目的を示す。

第1学年の試合では、「面だけの試合を楽しむ」として、面の攻防を展開させる。面を打ったり、防いだり、下がったりしながら打つ、攻防を展開することを目的とする。

第2学年の試合では、小手・面・胴のしかけ技を中心としながら、「試合を楽しむ」ことができることを目的とする。さらに、相手のしかけ技に対して「面返し胴」「小手抜き面」などの応じ技を楽しむことが望まれる。

第3学年の試合では、相手との攻防のかけ引きを通して「試合を楽しむ」ように、相手の起こりを捉える出ばな技を中心に展開し「出ばな小手」や「面抜き胴」を用いて試合が展開できるようにすることを目的とする。

5. まとめ

本研究は、試合における有効打突の観点から、中学生の大会レベル別に調査分析し、初心者指導における指導内容について、剣道技(技術学習項目)の観点から、技の選択やその順序性に関する基礎的資料を得ることを目的とした。

初級レベル大会における有効打突(161試合、有効打突204本)は、しかけ技が94.6%、応じ技は8.8%で有意差($p<0.001$)が認められた。しかけ技の中でも、基本の技が40.7%と最も多く、次いで出ばな技の32.3%であった。中級レベル大会における有効打突(112試合、有効打突127本)は、しかけ技が90.6%、応じ技は10.2%で有意差($p<0.001$)が認められた。しかけ技の中でも、出ばな技が42.5%と最も多く、次いで基本の技の26.0%であった。上級レベル大会における有効打突(314試合、有効打突371本)は、しかけ技が88.4%、応じ技は11.6%で有意差($p<0.001$)が認められた。しかけ技の中でも、出ばな技が31.3%と最も多く、次いで基本の技の28.6%であった。以上の知見から、初心者においてはしかけ技を中心に特にメンの指導に重点を置くべきことが示唆された。

本研究では、初心者の試合の有効打突に占めるしかけ技の有効性が顕著であることから、しかけ技を中心とした学習内容表を作成した。中学校における剣道指導計画の中で指導されるべき剣道技を精選し、その技を学年ごとに示した。さらに、有効打突を習得するために必要な「気剣体の一致+残心」の指導を重視し、武道の特色が対人競技であることを考慮した簡易の試合を常に意識した指導計画(剣道技)を作成した。

謝辞：本研究のデータ分析にあたり、統計処理等でご協力とご指導いただきました門田浩二博士（東海学園大学）に心より感謝いたします。

引用文献

- 恵土孝吉・端由紀美・渡辺香(1983) 剣道試合における分析的研究. —一流選手の技術— 金沢大学教育学部 紀要教育科学編32：81-91.
- 恵土孝吉・星川保・三橋秀三(1970) 初心者指導における一足一刀の間からの打突について. 武道学研究 3-(1)：40.
- 恵土孝吉・安江正紀(1984) 剣道試合における分析的研究(Ⅱ) —中高生の技術—. 金沢大学教育学部教科教育研究 20：225-233.
- 恵土孝吉・渡辺香・石井敬・小田佳子(1999) 剣道試合における分析的研究(Ⅲ). —超一流選手の技術— 金沢大学教育学部紀要自然科学編 48：47-50.
- 三橋秀三(1972) 剣道. 大修館書店.
- 文部科学省(2008) 中学校・学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都
- 文部省(1993)学校体育実技指導資料 第1集 剣道指導の手引(改訂版).
- 中村充・菅波盛雄・廣瀬伸良(1999) 剣道における試合内容分析—第45回全日本剣道選手権大会を対象として—. 武道学研究 31-(3)：26-34.
- 小田佳子(2001)「国際化を視野に入れた剣道練習法の研究」金沢大学大学院教育学研究科修士論文
- 笹森順三(1969)「剣道」加藤文明社
- 高野佐三郎(1915)「剣道」剣道発行所
- 巽 申直(2009) 第41回日本武道学会剣道専門分科会シンポジウム, 第1部中学校「保健体育科」における武道必修化と剣道実施上の課題. 武道学研究 40-(3)：43-48.
- 巽 申直・野村知弘・村山勤治・小田佳子・富樫泰一・服部恒明(2001) 移動軌跡からみた全日本剣道選手権優勝者宮崎正裕選手の試合特性—10年間の縦断的資料に基づいて—. 武道学研究 33-(2)：16-23.
- 巽 申直・富樫泰一・服部恒明(1997) 間合いからみた剣道の試合特性. 武道学研究30-(2)：27-35.
- 全日本剣道連盟(1993)幼少年剣道指導要領(改訂版).
- 全日本剣道連盟(2008)剣道指導要領.
- 全日本剣道連盟(2009)学校体育実技「武道」指導資料.中学校武道の必修化を踏まえた剣道授業の展開.